第6篇　労賃

第19章　出来高賃銀

〔友寄英隆「あなたと学ぶ『資本論』」月間学習　1999.6第13回〕

労働過程での労働者の1日の労働の

結果は、貨幣で表わしたり、時間で表す

ことが可能である。労賃についても時

間単位の時間賃銀を、生産物単位に移

しかえて表示することができ、これを

出来高賃銀という。あるいは、個数賃銀

ともいう。

出来高賃銀では、一個一個の出来高

ごとに、すべてについて剰余価値が入

り込んでいることをしっかりとつかむ

ことが重要である。

出来高賃銀では、労働者が熱心に働

いて、出来高を上げれば上げるほど、そ

れに応じて賃銀が増える。そして、剰余

価値がひとりでに増えるという仕組み

になっている。資本家にとっては好都

合うな「資本主義生産様式にもっとも

適応した労賃形態」である。資本家にと

っては、労働者を監督したり、労務管理

したりせずとも、労働者が自ら労働の

強度をあげたり、長時間働くことにな

っている。

〔的場昭弘―超訳「資本論」〕

出来高賃金に注意－労賃は労働力の

価値の転化形態だが、その特徴は労働

力の価値への正当な支払いが見えない

ことにあった。同様に出来高賃金では

ますます見えなくなる。

お互いに賃金を引き下げ合うシステ

ムー自ら率先して資本のために尽くす

労働者をつくる。

賃下げを可能とするシステムー原

料、諸費用を労働者が計算して、もう

けすぎを知るようになる。

（労働の強度をはかる）

（p.936）時間賃銀が労働力の価値または価格の転化形態であるのと同じように、出来高賃は時間賃銀の転化形態のほかならない。

出来高賃銀では、一見したところ、労働者によって売られる使用価値は、彼の労働力の機能、生きた労働ではなく、すでに生産物に対象化されている労働であるかのように見え、そしてこの労働の価格は、時間賃銀のように、労働力の日価値／与えられた時間数の労働日という分数によって規定されるのではなく、生産者の作業能力によって規定されるかのように見える。

（二つの形態の併存）

まず、この外観を正しいとする確信は、労賃のこの二つの形態が同じ時期に同じ事業部門意併存しているという事実によって、すでに強くゆるがされているに違いないであろう。たとえば、「ロンドンの植字工たちは、通例、出来高賃銀によって働いており、時間賃銀は、彼らのもとでは例外である。地方の植字工の場合にはその逆であって、そこでは時間賃銀が通例であり、出来高賃銀が例外である。ロンドンの港の大工は、出来高賃銀で支払われ、イギリスの他のすべての港の船大工は時間賃銀で支払われる」。ロンドンの同じ馬具製造所でも、しばしば、同じ労働にたいして、フランス人には出来高賃銀が、イギリス人には時間賃銀が支払われる。出来高賃銀が一般に支配している本来的工場においてみ、二、三の労働機能は、技術的理由からこの計算法を適用せず、そのため、時間賃銀で支払われる。とはいえ、労賃の支払いにおける形態の相違は――一方の形態が、他方の形態よりも、資本主義的生産の発展にとって有利でありうるとしても――労賃の本質をなにも変えないことは、それ自体としては明らかである。

（p.959）普通の労働日が12時間であり、そのうち6時間が支払われ、6時間が不払いであるとしよう。その価値生産物は6シリングであり、したがって、1労働時間の価値生産物は6ペンスであるとしよう。平均程度の強度と熟練で労働する一労働者、したがってある物品を生産するために実際の社会的必要労働時間だけを費やす一労働者が、24個――別々の24時間であれ、または、連続的製品の24個分の測定可能な部分であれ――を12時間のうちに提供するということが、経験則的に明らかであるとしよう。その場合には、この24個の価値は、それに含まれている不変資本部分を差し引けば、6シリングであり、各1個の価格は3ペンスである。労働者は、1個につき1／2ペンスを受け取り、こうして12時間では3シリングをかせぐ。時間賃銀の場合に、労働者が6時間を自分のために、6時間を資本家のために労働すると考えるか、または、各1時間のうち半分を自分のために、半分を資本家のために労働すると考えるかは、どちらでもよいが、それと同じように、この場合でもそれじれ1個の半分が支払われ、半分が不払いであると言うか、または12個の価格が労働力の価値を補填するだけで、他の12個には剰余価値が対化されていると言うかはどちらでもよい。

12時間に24個の物を生産する。12

時間で値段にすれば6シリングの物が

つくられる。したがって24個の1個ず

つの値段は、3ペンスだ。

労働者は時間賃金の場合は3シリン

グを受け取る。

出来高賃金の場合は、1個3ペンスの

1／2が出来高賃金として労働者に支

払われる。すなわち、24個にたいして

3シリングの賃金を受け取ることにな

る。

時間賃金では、持続時間によって支払

われ、出来高賃金では、一定時間内につ

くられる生産物の量によって支払われ

る。結局は、時間賃金から計算されて1

個あたりの生産物に対する出来高払い

額が計算されてくる。だから「転化され

た形態」という。

（p.960）出来高賃銀の形態は、時間賃銀の形態と同じく非合理的である。たとえば、二個の商品は、それに費やされた生産手段の価値を差し引けば、1労働時間の生産物として6ペンスの価値があるが、労働者はこの二個にたいして3ペンスの価値を受け取る。実際には出来高賃銀は、どんな価値関係も直接的には表現しない。ここで問題になるのは、一個の価値を、それに転化されている労働時間によってはかることではなく、その逆に、労働者によって支出された労働を、彼によって生産された個数によってはかることである。時間賃銀では、労働は、その直接的持続時間によってはかられ、出来高賃銀では、労働は、一定の持続時間中の労働がそのなかに凝縮される生産物の分量によってはかられる。労働時間そのものの価格は、結局は、日労働の価値＝労働力の日価値という等式によって規定されている。したがって、出来高賃銀は、時間賃銀の変化された形態にすぎない。

ある物を1時間に10個つくるとす

る。10個つくったときに1個あたり、

労働者に支払われる単価はどうやって

決まるのか。仮に、1個100円とすると

そのうち賃金の部分40円と漠然と決ま

ってくるように見える。100円のうち、

40円はどうして決まるのか。

賃金の方で、1日に12時間働いて、

品物を1000個つくるとして、1個当た

りいくらとその中から労働者に支払う

のはいくらと逆算して決められている。

だから、時間賃金が基本で出来高賃銀

という形に変えられるということであ

る。したがって剰余労働、剰余価値の搾

を含んでいる。

（出来高賃銀の独自性）

（p.960）次に、われわれは、出来高賃銀の特徴的な独自性をもっと立ち入ってこうさつしょう。

労働の質は、この場合には、製品そのものによって規制されているのであって、出来高価格が完全に支払われているためには、その製品は、平均的な品質を持っていなければならない。出来高賃銀は、この側面から見れば、賃銀減額および資本主義的ごまかしのきわめて実り豊かな源泉となる。

出来高賃銀は、資本家たちに、労働の強度をはかるまったく確かな尺度を与える。あらかじめ定められた経験によって確定されたある商品分量に対化される労働時間のみが、社会的に必要な労働時間とみなされ、そのようなものとして支払われる。だから、ロンドンの比較的大きな裁縫作業所では、あり一定の製品たとえば一役のベストなどが、一時間、半時間などと呼ばれ、この一時間が6ペンスに値する。一時間の平均的生産物がどれだけかは、実際の経験からよく知られている。新しい流行品や修繕などの場合には、一定の出出来高が一時間分に等しいかどうかについて、雇い主と労働者とのあいだに紛争が起こるが、結局はこの場合にも経験が決定する。ロンドンの家具製作所などでも、これと同様である。労働者が平均的な作業能力をもっていないならば、したがって一定の最小限の日仕事ができないならば、彼は解雇される。

❶労働の強度をはかる尺度となる。

時間では「さぼる・さぼらない」がはか

れないが、出来高賃金はモノサシとな

る。平均的作業能力をもたない者はク

ビになる。

ここでは、労働の質と強度が労賃の形態そのものによって規制されるので、この労賃の形態は大部分の労務監督を不用とする。それだから、この労賃の形態は、前述した近代的家内労働の基礎をなすとともに、等級的に編成された搾取および抑圧の基礎をなす。この制度には、二つの基本形態がある。出来高賃銀は、一方では、資本家と労働者とのあいだへの寄生者の介入、仕事の下請けを容易にする。介在者たちの利得は、もっぱら、資本家の支払う労働価格と、この価格のうち介者が労働者に現実に手渡す部分との差額から生じる。この制度は、イギリスではその特徴を表現して「苦汗制度」と呼ばれている。他方、出来高賃銀は、資本家に班長労働者と――マ二ファクチュアでは班長と、鉱山では採炭夫などと、工場では本来の機械労働者と――一個あたりいくらというある価格で契約を結ぶことを可能にし、班長労働者自身がその価格で自分の補助労働者の募集と支払いを引き受ける。この場合には、資本による労働者の搾取は、労働者による労働者の搾取を介して実現される。

❷監督が見張っていなくともみんな

働く。

　　　　　　「下請け」という形態が生まれる。「苦

汗制度」はイギリスの公式の名称。

　　　　　　労働者による労働者の搾取－日本の

「組」制度にあたる。

出来高賃銀がひとたび行われるようになれば、労働者が自分の労働力をできる限り強度に緊張させることは、もちろん労働者の個人的利益であるが、そのことは、資本家が労働強度の標準度を高めるのを容易にする。それと同じように、労働日を延長することも、労働者の個人的利益である――なぜなら,それにともなって彼の日賃銀または週賃銀が増大するからである。それとともに、時間賃銀ところで既述した反動が生じてくる――労働日の延長は、出来高賃銀が不変な場合にさえ、それ自体として労働の価格における引き下げを含むということを別にしても。

❸労働の強度を高めることができる。

すなわち、単価の引き下げである。

（p.964）時間賃金では、ほとんど例外なく、同一の機能にたいする同一の賃銀が支配しているが、出来高賃銀では、確かに一定分量の生産物によってはかられるとはいえ、日賃銀または週賃銀は、労働者の個人的な違いによって変動する――そのなかのある者は、与えられた時間内に最小限の生産物だけを生産し、他の者は平均の生産物を、第三の者は平均よりも多くの生産物をなど生産する。したがってこの場合には、実際の収入については、労働者個人の熟練、力、エネルギー、持久力などの違いに応じて、大きな差が生じてくる。もちろんこのことは、資本と賃労働とのあいだの一般的関係をなにも変えはしない。第一に、個人的な相違は、作業場全体にとっては相殺され、その結果、作業場は、一定の労働時間内に平均的生産物を提供して、その支払われる総賃銀は、その事業部門の平均的賃銀であろう。第二に、個々の労働者によって個人的にて供される剰余価値の総量は、その働者の個人的賃銀に対応しているから、労賃の剰余価値との比率は変化しない。しかし、出来高賃銀が個人により大きな活動の余地を提供することは、一方では、労働者たちの個性、したがって自由感、自立性を発展させる傾向があり、他方では、彼ら相互の競争を発展させることになる。だから、出来高賃銀は、個人の労賃の平均水準を超えて引き上げるとともに、この水準そのものを低下させる傾向をもつ。しかし、一定の出来高賃銀がながいあいだにわたって固定されていて、そのために、それを切り下げることがむずかしい場合には、業主たちが、例外的に出来高賃銀の時間賃金への強行的転化に逃げ場を求めることもあった。これに反対して、たとえば、1860年にはコブェントロイーのリボン製織工たちのあいだで大ストライキが起こったのである。最後に、出来高賃銀は、前述した時間賃金の主要支柱の一つである。

（出来高賃金は資本主義に最適）

（ｐ.966）以上の叙述から、出来高賃銀は、資本主義的生産様式のもっともそった労賃形態であることが明らかになる。出来高賃銀は、決して新しいものではない――それはとりわけ14世紀のフランスおよびイギリスの労働法令のなかに、時間賃金とならんで公式に登場する――とはいえ、それがはじめて比較的大きな活動の場を得るのは、本格的マニュファクチュア時代中のことである。大工業の疾風怒濤の時代、ことに1797－1815年の時期には、出来高賃銀は、労働時間を延長し労賃を切り下げるための梃子として役立った。この時期の労賃の変動にかんするきわめて重要な資料は、次の青書に見だされる――『穀物法にかんする請願についての特別委員会の報告及び証言』（1813－14年議会会期）ならびに『穀物の生育、取引、および消費の状態についての上院委員会の報告書ならびにいっさいの関係法律』（1814－15年議会会期）。そこには、反ジャコパン戦争開始以来の労働価格の連続的低落について記録に裏づけられた証拠が見いだされる。たとえば織布業では、出来高賃銀がひどく低下したので、労働日が延長されたにもかかわらず、日賃銀は、いまや以前よりも低くなった。「織布工の実質収入は、以前よりもはるかに少ない。普通の労働者に対する織布工の優越は、最初はきわめて大きかったが、ほとんどまったく消滅している。実際、熟練労働者と普通労働者との賃銀における相違は、いまや、以前のどの時期におけるよりも小さい」。出来高賃銀とともに増大した労働の強度および時間延長が、農村プロレタリアートにとってはどれほど効果がなかったかは、地主および借地農場経営者を擁護する党派的一著作から取ってきた次の文がこれを示している――「農耕作業のはるかに大きな部分は、日ぎめまたは出来高仕事で雇われている人々によって行われる。彼らの週賃銀は約12シリングであって、出来高賃銀の場合には、労働への刺激がより大きいので、週賃銀の場合よりも1シリングまたは2シリングも多くかせぐものと想定しうるとはいえ、彼の総収入を見積もると、1年のあいだにはしごとのないことがあるために、この増収が相殺されることがわかる。……さらに、この人たちの賃銀は、生活必需品の価格とある一定の比例関係になっているので、その結果、2人の子供をもつ1人の男性は、教区救済にたよらなくても彼の家族を養うことができる、ということが一般に見いだされるであろう」。当時、マルサスは、議会によって公表された諸事実に関して、次のように述べた――「実を言えば、私は、出来高賃銀の実行がおおいに広まっていることには不快の念をもって見ている。なにほどか、長期にわたる、　日に12時間または14時間の真に激しい労働は、そもそも人間とっては過度である」。

　工場法の適用を受けた作業場では、出来高賃銀が一般的通例となる。なぜなら、そこでは資本はもはや労働日を内包的にしか拡大できないからである。

出来高賃金の形態は、マニュファクチ

ュア時代に現れてきて、大工業時代に

広がった。現在の賃金制度はこの二つ

が基本だが、職能給や職務給など、いっ

そう複雑になっている。

（ｐ.969）労働の生産性が変動するにつれて、同分量の生産物が表す労働時間が変動する。したがって、出来高賃銀も変動する。というのは、出来高賃銀は一定の労働時間の価値表現だからである。前述の例では、12時間に24個生産されたが、この12時間の価値生産物は6シリング、労働力の日価値は3シリング、1労働時間は3ペンスであり、1個当たり賃金は１・1／2ペンスであった。1個のうちには1／2労働時間が吸収されていた。いま、たとえば労働生産性が2倍になった結果、同じ労働日が24個でなく48個を供給するとすれば、そして他の事情がすべて変わらないとすれば、出来高賃銀は1・1／2ペンスから3／4ペンスに低落する。というのは、各1個は、いままでは1／2労働時間ではなく、わずか1／4労働時間しか表さないからである。まえには、24×1・1／2ペンス＝3シリングであったが、

同じように48×3／4＝3シリングである。言い換えれば、出来高賃銀は同じ時間内に生産される出来高の数が増加する――したがって同じ1個の出来高に費やされる労働時間が減少する――のと同じ割合で、引き下げられる。出来高賃銀のこの変動は、その限りで純粋に名目的であるが、資本家と労働者とのあいだの絶え間ない闘争を呼び起こす。なぜなら、資本家がそれを口実にして労働の価値を実際に引き下げるか、または、労働の生産力の増大には労働の強度の増大をともなうからである。そうでなければ、労働者が、彼には自分の生産物に支払われるのであって、彼の労働力に支払われるのではないかのように見える出来高賃銀の外観を真に受け、そのために、商品の販売価格の引き下げが対応しないような賃銀の引き下げにたいして反抗するからである。「労働者は、原料の価格と製品の価格とを注意深く監視しており、こうして彼らの雇い主の利潤を正確に見積もることができる」。資本は、当然、このような要求を、賃労働の本性にかんするはなはだしい思い違いとしてはねつける。資本は、産業の進歩に課税しようとするこの越権を痛罵し、労働の生産性はそもそも労働者にはなんのかかわりはない、とあからさまに言明する。

生産性が上がれば、出来高賃金は下

がる。同じ物をつくるのに、必要な労働

時間が減るのと同じように出来高賃金

も下がっていく。12時間24個の事例で

は、1個あたりの賃金は1・1／2ペンス

であったが、48個できると1個あたり

の出来高賃金は1・1／2ペンスから3／

4ペンスに下がる。

労働者は抵抗に立ち上がるが、生産

性は機械のおかげだと賃下げを押し付

ける。